

槐多の「悪魔」と一九一〇年代東京

茂木 謙之介

はじめに

村山槐多をめぐっては、従来その絵画と詩とに研究の重点が置かれ、両者間のジャンル横断的な考察が主に為されてきた。その反面、槐多の小説テクストについてはエドガー・アラン・ポーの影響を留めた、探偵小説・怪奇小説の実験作として扱われるのが常であり、槐多の絵画や詩、および同時代の様々の文脈との関わりについては十分に論じられてきたとは言いがたい。

本稿では、槐多の小説「悪魔の舌」〔『武俠世界』四巻九号、一九一五年九月〕を中心に、一九一〇年代における槐多小説の独自性の在りかを探りたい。

「悪魔の舌」は、悪食によって一面に針の生えた長い舌を得た詩人・金子鋭吉が、人肉を食するに至り、遂には自殺するというストーリーが手記形式で描かれ、その手記を金子の

友人である語り手・「自分」が発見・披歴するという構造の小説であり、これまでSF、ミステリ、怪奇小説、怪談、そして探偵小説等、多岐にわたるジャンルのアンソロジーの一篇として繰り返し様々の書籍に収められてきた。

同テクストの初期の評価者としては江戸川乱歩が挙げられた。乱歩は「悪魔の舌」について「従来の読み物とは全く違った、ギラギラと五彩に輝く魅力をもつて、私をうった」〔奥の方には、ポオの犀利な黒い瞳が光っていたのではないかと、少なくとも「悪魔の舌」は理知の恐怖を見逃してはいなかった〕とし、探偵小説としての高評価を与えると共にポーの影響と色彩の印象の強さを指摘している¹。この乱歩の論は近年の先行論に至るまで影響を及ぼしており、同作品のイメージ形成に強くかかわっていく²。それに対し鈴木貞美は同テクストの成立の前提を〈都会〉という場に求め、またその時代背景として一九二〇年前後の佐藤春夫・芥川龍之介・谷崎

潤一郎が探偵小説を著した時期に先んずる「アーリーモダンイズムの時代」における「大正期の探偵小説の季節の産物」と位置づけた上で、「怪奇幻想小説などと言い換えてしまうと、時代性が消え失せてしまう」と指摘する。³ 鈴木の指摘以降、テクストにおける同性愛的描写の分析や、乱歩テクストへの影響そのものについての比較分析など、様々の論及が為されているものの、テクストの物語内容に寄り添った分析は少なく、またポーのテクストからの影響に関しては言及があるものの、具体的な検討は未済の状況である。

このような状況を受けて、以下本稿では、テクストの題名にも織り込まれている「悪魔」について着目し、検討を行いたい。テクスト内で多用される「悪魔」の表象は様々なイメージの交錯した特殊な様相を呈する。槐多の絵画および詩との連関や、同時代の所謂悪魔主義の潮流との相関関係、ポーのテクストからの影響、およびテクストの舞台として設定された東京という都市との関連にも注目しつつ、槐多の「悪魔」表象が同時代の日本の文脈において、いかなる意味を持つものであったかを明らかにしたい。

一、色彩の中の「悪魔」

本節では、手始めに「悪魔の舌」における「悪魔」の、その造形について考察を試みる。

まず、語り手である「自分」に犯罪の告白を行う詩人・金子による手記の部分で「悪魔」と見做されるものが、いかに表現されているのかを確認しよう。母の死によって「神経衰弱」と「小さい時の脊椎の病」が再発した金子は、鎌倉での転地療養を行う中で、鏡の中に「悪魔」の姿を見出す。

俺の舌は実に長い。恐らく三寸五分もあらうと云ふのだ。全体いつの間にかこんな延びたのか知ら、そして又何と云ふ恐ろしい形をした舌であらう。俺の舌はこんな舌であつたか。否々決して此んな舌ではない。が鏡を取つてよく見ると、やはり紫と錦との鋭い疣が一面にぐりぐり生えた大きな肉片が唾液にだら／＼滑りながら唇から突き出して居る。しかも尚よく見ると、驚くべき哉、疣と見たのは針である。舌一面に猫のそのの如く針が生えて居るのであつた。指を触れて見れば其はひり／＼するばかり固い針だ。かゝる奇怪な事実がまた世にあらうか。俺はまた以上に驚愕した事は鏡の中央に真紅な悪魔の顔が明かに現はれて居るのであつた。恐ろしい顔だ。大きな眼はぎらくと輝いて居る。俺は驚きの為一時昏迷した。

(四)

ここには「真紅な悪魔の顔」、「ぎらく／＼と輝く眼」、「固

い針」を持つ舌という鏡に映った顔のパーツが「悪魔」のそれとして描かれている。一見すると、金子が人間離れた非常な異様な顔へと変貌したかのようにも受け取れるものの、これを額面通りに受け取ることが困難なことには注意しておきたい。

なぜなら、この身体的な変化とされる出来事は金子鋭吉が一八歳の時点で生じた事件であり、テクスト冒頭で語り手の「自分」と出会った時点で彼が既に二五歳であったことを考えるならば、金子が「悪魔の顔」へと変化を経た上で彼らは出会っていることが前提となるからである。その金子との出会いの場面を「自分」が回想する場面で、それが「知らない人が見たら悪魔の集会」(一)とも思える会合であったことと、金子の、ある種魁偉な風貌が「自分」を引き付けたことが描かれているものの、その金子の容貌については「赤つばい面上」に「眼は大きく青く光」っていること、「厚い豊麗な唇」などの顔のパーツが示されるのみで、初対面の人物によつて客観的に人間ではなく「悪魔の顔」と判断されるようなものではないのである。

ここで、金子が自身の顔を「悪魔の顔」と認識するに至る経緯を確認しておこう。その直接的な原因については、金子は幼少期の習慣を披歴しつつ「このロマンチックな習癖は年と共に段々病的になつて、飛驒を離れる二年ばかり前の年であ

つた。半年ばかり私は妙な病気に悩んだ」(三三)と語り、それが「壁土」や「なめくぢ」「蛙蛭」「み、ずや地蟲」「金や紫や緑の様々の毒々しい色をした劇しい臭気を発する毛蟲いも蟲」(三三)などを好んで食する悪食の原因となつていくことが描写される。

この病に関しては「真直に歩く事ができず身体が常に前へのめつて居る。血色は悪くなり身体は段々痩せて来」(三三)ること、同時代までに水泳・散歩によつて健康を養うという身体観によつてリゾート地化していた神奈川⁶の海に転地療養していることを考え併せると、明記はされていないものの、結核カリエスを思わせる表現であることは言うまでもない。福田真人も指摘するように同時代における「ロマンチックな病」としての様相と共に実際に死に至る病としての結核は、金子の自己言及的な「詩人」性を担保するものともなり得ると共に、彼が死と隣接するような状態にあること、換言すれば健康な状態と対置される状態にあることは明白であろう。

しかし、ここで重要なのは、金子が病から回復して「身心も段々と健康になつて行つた。本然に帰つて来た」という状況下における描写である。ここでは転地療養で健康になつた際の容貌が「青白かつた容貌は真紅になつた。ぼんやりとした眼玉は生き生きと輝きだした」とあるように、いわば死に至る病と対置される「健康」「本然」の状態と、前述した

ような「悪魔の顔」に関する表現とが非常に近似しているのである。

この健康な状態の容貌と悪魔の顔との近似性は槐多の絵画における表現からも看取することができる。【図一】は村山槐多による「悪魔の舌」掲載時の挿絵の一枚目であり、【図二】は「悪魔の舌」と同じ一九一五年に槐多が描いた代表的絵画「尿する裸僧」である。両者共に、人物の描写に関しては近似した様相を持っており、「悪魔の舌」の一種異様に見える人物の顔が槐



【図一】村山槐多「悪魔の舌」挿絵



【図二】村山槐多『尿する裸僧』（1915年）

多の絵画作品の中では決して特異なものではないことが確認できると同時に、「悪魔の舌」における舌の表現が際立った異質さを提示しているということが指摘できよう。

では、先ほどから「悪魔の顔」と見做される顔色

と、油絵「尿する裸僧」の両者において共通する赤い色のイメージに注目したい。ここでは一九一三年の「充血」という槐多の詩を掲げる。

充血せる君 鬼薊

金と朱の日のうれしさよ

わめきうたへる街中に

金箔をぬるうれしさよ

派手に派手に血を充たせ

君が面に赤き血を

たとへ赤鬼の如く見ゆるとも

ひたすらに充血せよ

ここでは「君が面に赤き血を」「ひたすらに充血せよ」とある種の独特な表現で、活力にあふれる赤のイメージが展開されており、否定的要素には決して括られることのない赤という色のイメージが指摘できる。

いわば槐多の詩テキストおよび絵画における「赤」の特権性が指摘できようが、そのように考えた際に、「真紅」に描写される「悪魔」の表象は一考に値しよう。それは「健康」や人としての「本然」の状態と結び付けられ、死に至る病気と対置されているものとしてあり、決して否定的なニュアン



【図三】ルカ・シニョレリ「聖ベネディクトゥスの物語」(1497)

スにのみ回収できるものではない。この問題については後ほど改めて考察する。

また、同時に「悪魔の舌」においては、まさに表題ともなっている身体変化後の「舌」の描写の特異性が指摘できる。テクストの結部で「金子の死体を検査した時、その舌は記述の通り針を持つて居た」として語り手の「自分」にもその実在が指摘されているものであったが、いわばモチーフとしての悪魔性の担保として、この特異な舌が造形されていることは記憶に留めておきたい。

更に、「赤」という色彩描写で描き出される同テクストの「悪魔」イメージについては、ある種の異種混濁性をも指摘することができる。

ヨーロッパにおける悪魔イメージについて通史的な考察を行ったロベール・ミュッシャンプレによれば、西洋の悪魔イメージにおける悪臭と悪魔とは密接な関係性を確認

できるが、これは「悪魔の舌」において「野菜は総てどろどろに腐らせてから食った。腐敗した野菜のにはひと色と味とをだぶくと口中に含む味は実に耐らなく善い物であった」と、まさに腐敗させた食物の臭いへの言及が為されており、両者の交通可能性が指摘できよう。また、ヨーロッパの悪魔イメージを考えたとき、中世キリスト教絵画においては悪魔を赤く描く表現があり【図三】、先ほどまでに確認した「悪魔の舌」における赤い悪魔の顔のイメージとの関連が想起され、「悪魔の舌」における悪魔の造形と、十三世紀の西洋の悪魔イメージとの関連を考えることもできる。

しかし、ヨーロッパの悪魔イメージだけに槐多の「悪魔」は回収されるものではないことも指摘しておきたい。金子が「あらゆる物を喰った。そして又中毒した事がなかった」と、および「身体全部が神仙に変じ行く様に感じた」という表現を考え合わせるとき想起されるのは、中国東晋の志怪小説『搜神記』で知られる「神農」である。「神農以楮鞭鞭百草、盡知其平毒寒温之性、臭味所主。以播百穀。故天下號神農也」とあるような、百草を鞭打つて嘗め、中毒することがなかったと語られる中国神話上の人物・神農のイメージは、まさに「あらゆる物を喰う」ことで「神仙に変じ行く」金子の「悪魔」的側面と重なり合う。また「楮鞭鞭百草」という表現からも明快なように、神農にもまた赤いイメージが付与

されていることにも注意しておきたい。即ち「悪魔の舌」における西洋古典の悪魔イメージと東アジアの神仙イメージの交錯が指摘できるのである。

これら様々の文脈を交通させ、それらを自在に導入したイメージを生成してゆく、それが同テクストにおける「悪魔」表象の一特徴であると言えるだろう。

二、同時代「悪魔」言説との関わり

つづいて、同時代における「悪魔」をめぐる諸言説と同テクストの「悪魔」表現との関わり合いについて考察を試みたい。

まず、同時代言説として岩野泡鳴『悪魔主義の思想と文芸』（天弦堂、一九一五年）を補助線として所謂悪魔主義と「悪魔の舌」の表現との関わりを検討する。

予備的考察として岩野泡鳴のテクストと槐多のかかわりについて確認しておこう。まず岩野は、同書において、悪魔主義を以下のように説明している。

チアポリズム、乃ち、悪魔主義が第十九世紀の後半に於て仏蘭西に出現したのは、膚浅な常識、通俗な感情、並に平凡な俗美の技巧に対する勝利の凱歌であつた。ポドルのこの主義は、思想としては旧世界の生活を一新し

て、所謂『近代性』発展の道を開拓し、文芸としては、またエルレン等の表象主義、マネやゴンクルの印象主義、ニイチエの超人主義、オスカワイルド等の唯美主義の源泉となつた。欧州の思想界並に文芸界における天才にして、一人としてこれが洗礼をうけないものはないと云つていい程だ。

いわば悪魔主義におけるポードレルの特権性とその影響力を確認できるわけであるが、同時にポードレルについては「ポーの最上創作は『黄がね虫』の話でもなく、第二のポーとの評ある仏蘭西詩人シャルポドレルだと云はれる」と記述されるように、その生みの親としてポーが位置づけられていることには注意を要する。そのような位置づけを行った岩野について、槐多は日記に「岩野著『半獣主義』一寸よんだ。あんな事はもう俺にはとづくに解つて居る事だと思ふ」と述べ、岩野の『神秘的半獣主義』を彼が参照していること、及び同テクストの主張へのある種の賛意が寄せられていることが看取される。

また、ここで槐多とポーの関係性について簡単に触れておくならば、槐多は、彼の従兄弟であり、理解者であつた画家・山本鼎に宛てた書簡の中で、一九一四年六月前後の関心として「僕は、エドガ・ポーの小説を読んでから血族とか、

遣伝とか、精神病とか、云ふ物が、異常に美しく、面白く、見えて来ました」と述べており¹¹、ここからはポーのテクストに槐多が触れていたこと、およびモチーフ的な関心を寄せていることが看取できる。また、一九一五年五月二〇日付の槐多の日記には「おれは何だか起きるのが厭で床中にあつてポーのルーモルグを訳す、よいかげんな訳だ、此は画を描く材料の金にするのだ、世よ末法の世よ」とあるように¹²、画業の傍らポーの翻訳を行っていることがわかる。この訳文そのものは未だ発見されていないが、他の日記の記述と考え併せたとし槐多がポーのテクストを原典で参照していたことが指摘できる。このようなポーへの眼差しの面から考えても岩野のテクストと槐多のそれとの間に親和性を見出すことができよう。

では、ここで岩野のテクストにおける主張を確認しておきたい。¹³

まず、ポーに関しては、「ポーが初めて叙事詩的慣行の散漫な所以を看破し、叙事詩の実に——而も短編の叙事詩のみ——能く内部的音律が盛れることを説き、その詩に於ても、その話篇に於ても、微妙な情緒に依つて人間を空理固形の束縛から解放したのは、既に一種の人生観を思索し得てゐたとも云へよう。」とあるように彼の芸術と人生との隣接性が語られる。そして岩野のテクストの中で悪魔主義の体現者とし

て語られるボードレルについてはその主義と生活について「自然崇拜」「悪の腐肉的賛美」「厭世的人工論」「にほひに對する興味」「思想の金属化」という五項目を挙げて論じている。まさに芸術家の生活と芸術と悪魔主義との密接性が語られており¹⁴、中でも「自然」であることと悪魔主義の親和性が指摘されていることは、前述したような、「悪魔の舌」テクストにおける「本来」「健康」としての「悪魔」と共通の回路を持ち得るものといえよう。

この岩野的な悪魔主義の様相を踏まえた上で、再び「悪魔の舌」に立ち戻りたい。「自分」と出会いたての金子の印象は「彼は常に街上を歩いて居る。常に酒店や料理屋に姿を見せる。さうかと思ふと二三箇月も行方不明になる。正体が知れぬ。」(一) というものであり、その状態の金子は前述のように海水浴と悪食とを経て「本来に帰つて来た」状態であったが、ここでは生活と芸術における「悪魔主義」的詩人としての表象が予め示されていると解釈することができないだろうか。そしてそのことは金子自身の手記においても確認することができる。

途端鏡中の悪魔が叫ぶ声が聞こえた。「貴様の舌は悪魔の舌だ。悪魔の舌は悪魔の食物でなければ満足は出来ぬぞ。食へすべてを食へ、そして悪魔の食物を見つけろ。

それではなければ。貴様の味覚は永劫満足出来まい。」しばらく俺は考へたがはつと悟つた。「よしもう棄鉢だ。俺はあらゆる悪魔的な食物をこの舌で味はひ廻らう。そして悪魔の食物と云ふ物を発見してやらう。」鏡を投げると躍り上つた。「さうだ。この一箇月に舌がかくも悪魔の舌と変へられてしまつたのだ。だから食物が不味かつたのだ。」新らしい、まるで新らしい世界が吾前に横たはる事となつた。(四)

いわばここでは鏡から呼びかけて来る「悪魔」の言葉から「悟つた」、即ちその話しかけてくることを認知し、受け入れた「悪魔主義」的詩人としての金子が描かれていると言えようが、注意を要するのは、この呼びかけが鏡の中から為されるものであつたことである。先ほど確認した通り、「悪魔の顔」は即ち外部の人間から通常の人間として認知し得る金子の顔なのであり、ここでは言うなれば金子が自分自身の中に内在するものとして「悪魔」を見出し、それを受け入れたうえで「新らしい世界」を発見するという在り方に至る、ということを語つていたのである。

このある種の「本然」の在り様としての、内なる「悪魔」の存在については、金子がはじめて人肉を食する機会となる、墓の掘り返しの描写にも読み取ることができる。

俺は無意識にすぐ棒切を以つて其土まんぢゆうを掘り出した。無暗に掘つた。狂人の様に掘つた。遂には爪で掘つた。小一時間ばかりで吾手は木の様な物に触つた。『棺だ。』土を跳ね除けて棺の蓋を叩き壊はした。そしてマツチをすつて棺中を覗き込んだ。(略)好きな腐敗の悪臭が鼻を撲つ。先づ苦心して乳房を切り取つた。だからだらと濁つた液体が手を滴たり伝つた。それから頬べたを少し切り取つた。この行為を終へると俄かに恐ろしくなつて来た。『どうする積りだ、お前は。』と良心の叫ぶのが聞えた。しかし俺はしつかり切り取つた肉片を、ハンカチーフに包んだ。そして棺の蓋をした。土を元通りかぶせると急いで墓地を出た。俵をやとつて富坂の家へ帰りつた。(五)

ここでは「俺は無意識にすぐ棒切を以つて其土まんぢゆうを掘り出した。無暗に掘つた。狂人の様に掘つた。」とあるように、「無意識」の行動としての人肉への欲求が描かれると同時に、「俄かに恐ろしくなつて来た。『どうする積りだ、お前は。』と良心の叫ぶのが聞えた。」とあるようにそれが良心、即ち理性を取り戻した後の意識的で規範的なものに對置されるものとして設定されていることが看取されよう。

一柳廣孝は、明治末期から大正初期の日本における「無意識」について、フロイト的な「無意識」の受容初期の状況下で、速水滉『現代之心理学』（不老閣書房、一九一四年）などによって精神療法的一端として評価されていたこと、そして同時代が大正中期においてフロイト精神分析が一般に認知されていくまでの過渡期的な状況に在ったことを述べているが、まさに一九一五年発表の「悪魔の舌」というテクストは、近代科学によって「霊」が科学の分析対象として否定される状況の中で、新たな可能性として生み出されてきた「無意識」という解釈格子を導入し、そこから「悪魔」が内発してくる状況を見出していく側面を持っていたということができよう。

また、「悪魔の舌」における内面からの呼び声としての「悪魔」の様相については、ポーのテクストにおける「悪魔」の位置づけとの関連が考えられる。

I seized him; when, in his fright at my violence, he inflicted a slight wound upon my hand with his teeth. The fury of a demon instantly possessed me. I knew myself no longer. My original soul seemed, at once, to take its flight from my body; and a more than fiendish malevolence, gin-nurtured, thrilled every fiber of my frame.

この *The Black Cat* (1843) は、被害者の身体に刻印される不連続的なしるし等の諸表象において「悪魔の舌」とのあいだに間テクスト的な関係を取り結ぶテクストである。引用の一節では、視点人物の ¹⁵ が黒猫に対する残酷な行為に及ぶに当たり、〈内側〉から demon 性がわき上がる状況が描かれており、同時代のヨーロッパにおける〈内面の存在〉としての悪魔の認識を確認することができるなど、¹⁶ まさに岩野の提示したような悪魔主義の様相とも響き合うものとして評価できるだろう。

このような「無意識」・「本然」・「健康」な状態としての「悪魔」の活動を考えたとき、それは同時に、「悪魔の舌」という小説における破滅的な結末にも深く関わっていくことにも気付かされる。

そもそもこの「無意識」・「本然」・「健康」と「悪魔」の隣接について考えを致したとき、「健康」な状態にあることと「食人」という行動への欲求が結びついていること、即ち同時代の社会規範に照らすならば、肯定されるべきものと否定されるべきものとが同居するという、ある種の〈捻じれ〉が存していることは記憶に留めておきたい。

テクスト後半で、内なる「悪魔」の声に従い、衝動的に人肉食を経験した金子は、以下のような行動をとる。

次の日俺は終日掛かつて俺の室の床下に大きな穴を掘つた。そして板で囲つた。人間の貯蔵室を作つたのである。ああ此処へ俺の貴い食物を連れて来るのだ。(六)

また金子は殺人によつて人肉を手に入れるに際し「麻醉薬とハンカチーフをポケットに用意した。これで睡らしてすぐ引つ張つて来る事」(六)にする。まさに、計画的かつ「意識的」な行動を起こし、特に最後の自分の弟をそれと知らずに食べる場面では「用意した鋭利な大ナイフ」(六)で殺害に及び、その上で「俺は出来得る限り細かくこの少年を食つてしまはうと決心した。そこで一のプログラムを定めた」(七)とあるようにその行動を理知的に整序している。ここで特に注意を要するのは前述のように、「本然」の存在としての「悪魔」性を担保するものとして描き出されていた、針を持つ「悪魔の舌」という特異な表現がここでは描かれなくなつてゆく、ということである。まさにこの場面においては金子の「悪魔」性が失調していると言ふことができるのだ。いわば、ここでは「本然」の存在としての「悪魔主義」的詩人・金子鋭吉が、〈意識的〉な犯罪を為すようになる、即ち自然状態と密接した「悪魔主義」から逸脱していく状況の中で、それが弟を意図せずして殺害し、金子が自殺するといふ

破局につながつていくという構造が提示されているのである。健康になることと、食人とが直結するというこのテクストにおけるある種の〈捻じれ〉は前述した通りであるが、ここではそれが反転する形で理性の獲得と登場人物の破滅とが直結していることが指摘できよう。この二つの〈捻じれ〉はまさにテクストにおける構造的な課題を浮かび上がらせるものとなる。これを論ずるために、次節においては「悪魔の舌」における物語の場、かつ同テクストが生成し展開した言説空間としての帝都東京を考えてみたい。

三、「悪魔」と帝都東京

この問題を考えるに際して、まず検討すべきは、「人を食え」と迫る内なる「悪魔」に対し、金子が「俺はコンゴウの土人ではない。善き日本人の一人だ。」(五)という論理を以て抵抗する場面である。同時代のコンゴウの人びとについてのイメージとしては、初期段階の未開文明の解明を目指した人類学によつて未開人・野蛮人として対象化され、文明人と対置されたものが挙げられており、食人の文化も一部紹介されている。その「コンゴウの土人」に対置される「善き日本人」というのが、食人の欲求と直面した金子にとつての理性的な歯止めメカニズムとなつていたのである。

「悪魔」化する以前のある種の意識的・理性的な在り様か

ら「本然に」帰った彼は、既にその規範から逸脱した存在になつてゐるが、前述のように意識的犯罪を犯すようになってから彼の破滅は始まる。それは彼の弟を、計画的犯行によつて殺害し、食べてしまうことによつて直截的にはもたらされるが、ここで注目すべきはその計画的犯行の場である。

汽車は上野に着いた。ステーションを出ると少年は暫らくぼんやりと佇立して居たがやがて上野公園の方へ歩いて行く。そして一つのベンチに腰を掛けるとじつと淋しさうに池の端の灯に映る不忍池の面を見つめた。／見廻はすと辺りには一人の人も居ない。己れはそつとポケツトから麻醉薬の瓶を出してハンカチーフに当てた。ハンカチーフは浸された。少年はぼんやりと池の方を見て居る。いきなり抱き付いてその鼻にハンカチーフを押し当てた。二三度足をばたく／＼させたが麻薬が利いてわが腕にどたり倒れてしまつた。(六八)

上野公園は不忍池のほとりで金子は弟の五郎をそれとは知らずに拉致する。当時の上野公園が既に帝室に所属する場であるのは周知のとおりであり、吉見俊哉が指摘する通り、¹⁸ 同時代においては複数回の博覧会が開催され、天皇の臨幸するような、幾重にも天皇権威に刻印された場なのである。「無

意識」の所業ではない、計画的な犯行を犯した彼に自死をせまるものとしての天皇(制) 国家システムの存在が透けて見えてくるのだ。

この事はテクスト冒頭において金子の犯罪告白の場として選ばれたのが「クダンサカ」(二) Ⅱ「九段坂」、即ち戊辰戦争以降の「英霊」という同時代の国家規範における「善き日本人」の祀られる靖国神社であつたことも共鳴するものであろう。まさに、犯罪の告白は「善き日本人」との対比の中で構成されていたのである。

言うなれば「悪魔」を自滅に導く帝国日本の規範が確認されようが、ここで想起すべきは先ほども述べたような、病に对置される「健康」「本然」な在り様としての「悪魔」の存在である。前章までに検討した通り、同テクストにおける悪魔が決して否定的なニュアンスのみで回収できないことを考えたとき、「健康」「本然」を抑圧するものとして社会規範があることを逆照射する構造を持つものとして評価することはできないだろうか。川村邦光は同時代の日本社会が、知識人・文化人による文化的・社会的な管理・支配を推し進める統治のポリティクスが稼働した結果、心・精神の領域へのヘゲモニーを確立していたことを指摘しているが、¹⁹ まさに心身の国家統制が成立していく中で、²⁰ そこからの隠微な逸脱をはかるテクストとして「悪魔の舌」の可能性が指摘できると共

に、前述のようなテキストにおける〈捻じれ〉に応答するものであると言えよう。

最後に、少々蛇足めくが、このような同時代への批評性を持ち合わせたテキストとして考えたときに出来してくる、金子の手記の外側として設定された「自分」なる人物の語りのレヴェルにおけるテキストの綻びの可能性について言及しておきたい。

テキスト冒頭で夜中に「青い深い天空に見入つて居る」(一)「自分」の在り様が呈示され、また「自分」が金子と出会った場所である宴会は「病的な人物ばかりを以て催された物であつたから、何れの来会者を見ても、異様な感じを人に与へる代物ばかりで、知らない人が見たら悪魔の集会のごとく見えた」(二)ものであり、そこに参加可能な「病的な」「自分」というものが設定されていることが看取される。いわば不可解な行動を行う「自分」が「病的な」存在として描写されており、ここからは「自分」が信用に足る、透明な語り手ではないということが指摘できる。

すると、物語末尾で「金子の正気を疑はざるを得なかつた」(七)と語られるように金子の狂気として手記の内容を片づけること、および金子の手記における「悪魔の顔」を「詩人の幻想にすぎまい」(七)としてしまうことは困難にならう。なぜなら、「彼は人間ではなかつた。彼は悪魔であつた」

(二)と「自分」が述べるように、「自分」自身の評価自体が矛盾をはらむがゆえである。このような物語の構成の中で二重三重に手記の内部に関する事実関係の決定は困難になり、〈真実〉は宙吊りにされてゆく。ここからは森岡卓司が指摘する「日本近代文学に通有の、主体と幻想という問題系」が浮上すると共に、同テキストが発表された、大逆事件以降の帝都東京と言う言説空間における、社会規範への批判的な言説を困難にした時代状況とも連関する可能性が指摘できる。²³ おわりに

以上本稿をまとめるに、「悪魔の舌」の「悪魔」表象からは槐多の詩や絵画における視覚的イメージとの連関や同時代に在り得た様々の「悪魔」との異種混濁性が確認できると共に、同時代言説とのつながりからは、都市生活・結核に對置されるものとしての「健康」が「本来」・「無意識」といったものと接続されると共に、「健康」的であることと、「悪魔」的であることが密接性を以て表現されており、それは泡鳴的悪魔主義やポールのテキストとの連関の中で位置づけられることが確認された。

そしてその「健康」・「本来」な状態としての「悪魔」が理性と天皇(制)国家との出会いによって破局をみることに、および語り手・「自分」の定位の困難さからくる物語の決定

不可能性からは、同時代の社会的規範への抵抗を隠微かつ周到に試みるテクストとして位置付け得ることを指摘した。

まさに一九一〇年代の、様々の文脈が交錯する、そのなかで生成したテクストとして「悪魔の舌」の解釈可能性は開かれていたのである。

【付記】本稿は平成二四年度日本比較文学会東京支部九月例会（九月一五日於日本大学）の報告内容に加筆修正を加えたものである。会場で御指導賜った方々にこの場を借りて感謝申し上げる。なお、槐多テクストの引用は『村山槐多全集』（弥生書房、一九六三年）に拠り、引用に当たっては章番号を付した。The Black Catの引用はPoe,E.A The works of Edgar Allan Poe v.7 (New York: Arcadia House, 1950)に拠った。

注

- 1 江戸川乱歩「槐多「二少年凶」」「江戸川乱歩全集七」（講談社、一九六九・初出『文体』一九三四年八月）
- 2 鮎川哲也「解説」「幻の傑作ミステリー」（双葉社、一九七六年）等を参照。
- 3 鈴木貞美「槐多の時代」（『ユリイカ』三二巻九号、一九九九年）

4 Jeffrey M. Angles WRITING THE LOVE OF BOYS: REPRESENTATIONS OF MALE-MALE DESIRE IN THE LITERATURE OF MURAYAMA KAITA AND EDOGAWA RANPO (110011年オハイオ州立大学博士論文)

5 小松史生子「都市を駆ける人獣 『怪の物』、『悪魔の舌』、そして『人間豹』への系譜」（『金城学院大学論集 人文科学編』九巻一号、二〇一二年）

6 福田真人「結核の文化史 近代日本における病のイメージ」（名古屋大学出版会、一九九五年）

7 このような槐多テクストにおける赤い色の特権性に関しては槐多評価の初期段階でも指摘のあるものであり、草野心平『村山槐多』（日動出版部、一九七〇）などでも確認できるほか、近年でも二〇〇九年の松濤美術館展でも「村山槐多 ガランスの悦楽 没後90年」とあるように赤への注目が為されるなど槐多の作者イメージと結び付けた言説は強固に存すると言える。

8 ロベール・ミュッシュャンブレ著／平野隆文訳『悪魔の歴史』（大修館、二〇〇三年 [Robert Muchenbled, Une historie de diable, Editions du seuil, 2000]）

9 中央研究院 漢籍電子文獻 瀚典全文檢索系統 (<http://hanji.sinica.edu.tw/>11014年11月11日閲覧)

10 村山槐多「日記」（一九一四年三月一日付）

11 村山槐多「山本鼎宛書簡」（一九一四年六月）

12 村山槐多「日記」（一九一五年五月二〇日付）

13 岩野の同テクストに関しては赤瀬雅子「岩野泡鳴におけるディアポリシイズムの影響——悪魔主義の思想と文芸」を中心とし

- て」(『桃山学院大学人文科学研究』八号、一九七二年)を参照した。
- 14 同様の指摘は浜名恵美「死の恐怖と悪魔主義」(『ユリイカ』一九卷三号、一九八七年三月)でもなされている。
- 15 一柳廣孝『無意識という物語 近代日本と「心」の行方』(名古屋大学出版会、二〇一四年)
- 16 前掲ロベール・ミュッシュャンブレ二〇〇三年
- 17 寺石正路『食人風俗志』(東京堂、一九一五年)には「(上コンゴ)地方 Upper Congo の黒人も食人の風あり死人を食ふ」とある。
- 18 吉見俊哉『都市のドラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』(河出文庫、二〇〇八年・初出 弘文堂、一九八七年)
- 19 川村邦光「近代日本における憑依の系譜とポリティクス」(川村邦光編『憑依の近代とポリティクス』青弓社、二〇〇七年)
- 20 しかも、かかる国民の「健康」に対する国家統制が、心身健全な兵士を再生産するシステムと密接不可分なものであり、「善き日本人」の祀られる告白の場としての「クダンサカ」というトポスと響き合うものでもあるという事は見逃せない。
- 21 ローズマリー・ジャクソン「幻想文学と決定不可能性」(『国文学』第二九卷一〇号、一九八七年八月)の「語りの不安定こそが、モードとしての幻想の核に置かれている」という定義に従えば、同テクストは所謂「幻想文学」との親和性を持つことは言うまでもないだろう。
- 22 森岡卓司「差出人不明―江戸川乱歩「人間椅子」試論」(『日本文芸論稿』第二六号、二〇〇〇年)
- 23 このような槐多テクストの可能性は、浜田雄介「村山槐多の探

偵小説 江戸川乱歩からの視点」(『ユリイカ』三一卷九号、一九九九年)などによって指摘されているような、ナショナルリズムや植民地主義と親和性を持った雑誌としての『武俠世界』の編集意図と槐多テクストを密接に連関させる枠組みに亀裂をいれるものとなり得よう。まさに、極めて隠微な形で掲載メディアを読み替えるような批評性を同テクストは持ち合わせていたのである。